

自己表現技法としての コンピュータリテラシ教育の試み

2E-9

五十嵐 智（明星大学情報学部）

1. はじめに

社会の情報化が進む中、大学改革の波と歩調をあわせて、多くの大学で情報処理教育が教養科目として導入されている。筆者の大学でも、コンピュータリテラシとしての科目が1年次の必修科目とされている。従来の一般情報処理教育としてはワープロや表計算、プログラミング言語の学習といった、いわば情報の“加工中心”の教育が主であった。しかし、今後のネットワークを中心とする情報化社会を考えれば、むしろ、情報の取得、生産、加工、伝達といった情報の“流通中心”の教育がなされるべきである。とくに重要なことは情報の生産者、情報の発信者として、情報流通の技術と作法を身に付けることである。この「技術と作法」に相当するのが“自己表現の能力”，すなわち、

- ・ 事実や状況を正しく伝える能力
- ・ 自分の主張を明確に述べる能力
- ・ 他者の意見を不同意の立場で受け入れ、議論する能力

であるとする。このような能力こそが、情報化社会における最も基本的なリテラシではないだろうか。

このような認識のもと、筆者はコンピュータリテラシの教育を自己表現の技法を身に付ける訓練の場ととらえ、それを目的とした教育を試みている。本稿ではその教育内容について報告する。

2. リテラシ教育としての内容

表1に示すように半学期12回の授業枠内で、キーボード教育（タッチタイプ）、テキスト編集、ファイル管理、文書清書・描画システム、電子メール、電子ニュースの内容を取り上げている。基本的には

表1 リテラシ教育としての内容

第1, 2回	・ 利用マナー ・ タッチタイプ
第3回	UNIXの基本的利用 ・ ログイン, ログアウト ・ パスワードの設定 ・ Xウィンドウの操作法 ・ UNIXの基本コマンド
第4回	Emacsによる英文テキスト編集
第5回	Emacsによる日本文テキスト編集
第6回	ファイルシステム
第7回	文書清書システム (LaTeX)
第8回	描画システム (tgif+)
第9, 10回	電子メール
第11, 12回	電子ニュース

ネットワーク環境のもとでのコンピュータの操作法、電子文房具としての利用法、他者とのコミュニケーション手段としての利用法を中心にテーマを組んでいる。その枠組みの中で、自己表現の技法、情報に関する基礎概念、情報化社会における倫理といった内容を含めている。

3. 自己表現技法としての教育内容

3.1 文書作法

レポートの作成を通して、文書の構成法、日本語の正書法、図表の書き方などを身に付けさせることを目的とする。とくに、自己の合理的主張を伝達するためには、明快な文章を書くこと、そのためには構文のしっかりした文、構造の完全な文を書くことを強調する。タッチタイプのテーマ時に、練習時間と入力速度の関係を測定させてあるので、その結果をレポートにして報告するテーマを課す。具体的には次の3課題をそれぞれ1カ月程度の時間的余裕もたせて自習課題として与えた。

- (1) 原稿用紙による手書きレポートの作成
- (2) レポートの自己評価
- (3) LaTeXおよびtgif+を使ったレポートの作成

(1) では、横書き原稿用紙（罫線だけのレポート用紙は不可としている）に手書きで書かせる。この段階では、まず原稿用紙の使い方を習得させる。日本文の正書法を身に付けるには、まず原稿用紙の使い方を知ることが必要であると考えからである。実際に原稿用紙に書かせてみると、驚くほど原稿用紙の使い方を知らない者が多い。それらは添削の上、再提出にする。(2)では、文献[1]を読ませた上で、表2に示す課題を課して、その結果を報告させる。(3)では、文書や表をLaTeXで、練習時間と入力速度の関係（学習曲線）のグラフをtgif+で作成させ、きちんとした体裁のレポートを提出させる。ここで提出されるレポートは最初のものに比べ、格段の違いが認められる。文書作法の技術は自然まかせではなく、意識的に訓練する必要があり、その意味でこの課題の効果は大きいと感じた。

3.2 電子メールによる情報交換

他者との情報交換手段としての電子メールの利用法と利用マナーを実際に使いながら身に付けることを目的とする。まずMh-eの使い方や電子メールの利用マナーを説明する。次に、新たな交流を作るという趣旨で面識のない他者に自己紹介書を送り、情報交換の方法を身に付けさせる。同じクラス内では緊張感が欠けるため、異なる学部学科のクラスの学生にメールを送らせた。メールを出すときにはカーボンコピーに筆者を指定させ、メールの内容や言葉使いなどについてコメントしたメールを本人に返し、マナーの徹底を図った。実際、非常に不見識な内容のメールを出す学生もおり、それへの対策としてもカーボンコピーをとることは必要であると感じた。

3.3 電子ニュースによる討論

電子ニュースを利用して、討論の方法を身に付けることを目的とする。まずニュースグループのコミュニケーション形態、Gnusの使い方、利用マナーやルールを説明し、fj.recのニュースグループを探訪させる。とくに記事の書き方や議論の仕方、言葉使いなどに注意を向けさせる。次にローカルなニュースグループ上で「大学の授業では出席をとった方がよいか、とらない方がよいか」というテーマで、デ

表2 レポートの自己評価課題

<p>木下是雄著：理科系の作文技術，中公新書，中央公論社(1981年)を読み，次の事項について自分のタッチタイプに関するレポートを評価せよ。評価は各項目ごとに行い，項目ごとの評価を報告せよ。(括弧内は各事項についての説明が書かれている同書のページである。)</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) レポートの内容構成，文章の組立は適切か。(p. 30～p. 57) (2) パラグラフの立て方は適切か。(p. 71) (3) パラグラフの長さは適切か。(p. 72) (4) 逆茂木型の文章はないか。(p. 78～p. 88) (5) 自分の主張，考えを明確に述べているか。(p. 89～p. 100) (6) 不適切な“ばかしことば”を使っていないか。(p. 97) (7) 事実と意見を明確に区別しているか。(p. 101～p. 117) (8) 事実の記述は正確で明確か。(p. 107) (9) 意見の記述は明確か。(p. 108) (10) 事実を記述する文に，主観に依存する修飾語は混入していないか。(p. 110) (11) 1文の長さは適切か。(p. 118) (12) 文の主語は明確か。(p. 120) (13) 文の格は正しいか。(p. 122) (14) “まぎれ”のある文を書いていないか。(p. 125～130) (15) 字面の白さは適切か。(p. 136) (16) 漢語・漢字の用い方は適切か。(p. 136) (17) 不適切な受身の文はないか。受身の文を多用していないか。(p. 137～p. 140) (18) ベタ書きの文章はないか。もしあれば，並記にできないか。(p. 140～142) (19) 文章中の区切り記号の使い方は適切か。(p. 142～p. 149) (20) 図表の描き方は適切か。(p. 175～p. 178)

ィベートを真似た討論を行った。記事の投稿にあたっては次の事項を守らせる。

- ・最初に結論を述べる。
- ・意見と事実を区別する。
- ・意見は論理的，具体的に述べる。
- ・意見には必ず論拠を示す。
- ・情緒的，感情的，曖昧な表現はしない。
- ・議論を飛躍させない。
- ・論点は一つ一つ独立させ，明確にする。

この課題には，インターネット上のニュースグループに参加する練習としての意味もある。このような集団討論は，健全な批判精神を養い，さらに自分と対立する意見に対しても考えていけるだけの思考を身に付けさせる上で，よい訓練になると考える。

4. むすび

今後の情報化社会では，正しく事実や状況を伝える能力，明確に自分の意見や疑問を述べる能力，筋の通った議論によって他者を説得する能力など，言葉を仲立ちとした“自己表現の能力”がますます重要な能力となってこよう。その意味でこのような内容をリテラシ教育の中で取り上げることは意味のあることと考える。

文献：[1] 木下是雄：“理科系の作文技術”，中央公論社(1981)